

## ボー・ブランメル——その生涯とダンディズム

山口 和彦

ダンディズムという言葉に接して、わたしたちが連想するイメージはどのようなものであろうか。瀟洒な服装に身を包んだ男性の姿を想起する人もいるであろう。あるいは服飾上の洗練だけでなく、物腰や言葉遣いなど、生活態度全般の趣味のよさを指す言葉として理解する人もいるかもしれない。しかし、ここにいうダンディズムとは、そうした身嗜みや行住座臥の美学と表裏一体をなす精神の在り方、たとえばボードレールが「現代生活の画家」(1863)のなかで、次のように規定した精神の貴族主義に近いものである。

ダンディズムとは、思慮の浅い大勢の人々がそう思っているらしいような、身だしなみや、物質的な優雅を法外なところまで追及する心、というのともまた違う。そうしたものは、完璧なダンディにとっては、自分の精神の貴族的な優越性の一つの象徴にすぎない。だから、何よりもまず品位 distinction を重んじる彼の目から見れば、身だしなみの完璧とは絶対的な単純のうちにあるものだし、事実、絶対的な単純こそ品位をもつ se distinguer ための最善の道である。<sup>1</sup>

このような「精神の貴族的な優越性」を重んずる、いわば精神的ダンディズムは、しかし、ダンディズムの史的変遷の過程において、かならずしもその黎明期から明確に定立されていたわけではなかった。濫觴期のダンディズムはまず、風俗的次元における流行現象として、18世紀末から19世紀初頭にかけての英国上流社会に生起したが、この段階では主に服飾や生活様式面での美意識を意味するものであった。それがヴィクトリア時代にいたり、徐々に深く市民社会に浸透するようになると、表面と内実といった倫理的問題とも係わりつつ、賛否相半ばする反応を引き起こしていった。<sup>2</sup> その間、大陸諸国にも伝播したダンディズムは、主としてフランスにおいて内的価値を見出され、その外面的美意識を裏づける精神的・哲学的意味を賦与されることとなった。その深化と定式化の過程で、重要な貢献をはたしたのが、バルベール・ドールヴィイであり、ボードレールであった。

もっとも、ひとつの風俗現象として出来た初期の形態のダンディズムのうちに、のちの精神的ダンディズムへと通じる要因がまったく潜在していなかったわけではない。そこには、ダンディズムという近代的な存在方式のもつ特質が、少なくとも萌芽のかたちで胚胎していたと思われる。拙論では、ダンディズムの濫觴期を生きたジョージ＝ブライアン・ブランメル(1778—1840)の生涯に着目して、そのダンディズムの特徴を分節化するとともに、風俗史的側面から捉えられがちな彼の美学が、ボードレールらによる精練と醇化をうながす契機をも内包するものであったことを明らかにしたい。俗眼には、ただ“虚栄の市”を潤歩するスノビズムの怪物としか映じなかったこの一介の伊達者こそ、ダンディズムの精神と風土と

を、最も鮮やかに、最も典型的に、人生の栄光と悲慘を代償として具現した人物にほかならないからである。

## I

ジョージ＝ブライアン・ブランメルは、1778年6月7日、ブランメル家の第三子としてロンドンに生を享けた。<sup>3</sup>彼の祖父にあたる人物は、菓子屋であったとも従僕であったともいわれるが、父ウィリアムの代になって一家の社会的地位は向上した。グラッドストン内閣の大蔵大臣フレデリック・ノース卿の秘書を経て、ノース卿の首相就任（1770年）とともに新宰相の私設秘書となったウィリアムは、俸給の神様とも綽名されたノース卿のもとで、当時の秘書職としては破格の俸給を得るようになったからである。由緒正しい家柄で資産にも恵まれたリチャードソン家の令嬢アンと結婚したのも、この間のことである。その後、民意弾圧やアメリカの独立等によって、不人気となったノース卿が1782年に首相の座を退くと、ウィリアムも引退するが、すでにこの頃までには俸給の蓄えや不動産所得、妻の持参金などによって相当の財をなし、ロンドンとドンキャスターの二箇所に邸宅を構えるまでになっていた。引退後は、これら二つの邸宅で悠々自適の余生を送ったが、もてなし上手で気前もよかった彼の人柄も手伝い、シェリダンやチャールズ・J・フォックスらの名士たちもしばしば邸を訪れて政治・文学談義に花を咲かせたという。

このような境遇のなかで、二男一女の末子として幼少年期を過ごしたブランメルは、1790年、パブリック・スクールの名門イートン校に入学する。<sup>4</sup>イートンといえばハロー、ウィンチェスター等とともに夙に世評が高いが、当時のパブリック・スクールの生活環境は、教育、食事、寄宿施設等、いずれの面でも十全に整ったものとはいえず、生徒たちの素行も、概して粗暴で品性を欠き、時には自堕落でさえあったという。<sup>5</sup>こうした学園生活のなかで、ブランメルは臨機応変の才や自由闊達さ、さりげない親切心といった持ち前の資質を开花させ、終生にわたる交友関係を育てていく一方で、『ダンディーと粹人文士たち』の著者レオン・ヴィンセントも指摘するように、「おどろくべき冷静さと計算しつくされた足さばき、優雅な身のこなし、申し分のない身嗜み」<sup>6</sup>等、将来のダンディーを予感させる人格的素地を形作っていった。また、自制心や謙虚さの重要性を体得し、権威や伝統は対処の仕方さえ誤らなければ大いに活用できるものであることを彼が学びとったのも、このイートンでの集団生活を通じてであった。

やがて1793年、イートン校を卒業したブランメルはオックスフォード大学オーリエル・カレッジに進学するが、入学後ほどなくして父の他界によって学資を絶たれ、退学を余儀なくされる。知力は有するものの、学究心を欠いていたとする見方もあるが、いずれにせよ彼の運命をこのとき決定づける要因となったのは、イートン在学中にすでに知遇を得ていたといわれる皇太子（のちの国王ジョージ四世）の存在であった。二人の出会いの場所についても、ブランメルは叔母サール夫人の田舎家とするもの、ウインザー宮とするもの等、諸説があるが、ともあれ十六歳の年齢差を超えて、趣味、嗜好を共有する皇太子の後楯を得たことによって、彼の前途に新たな世界への展望が開けたことは確かであった。退学後まもなく、彼は皇太子みずから指揮をとる近衛第十軽騎兵連隊に旗手としての入隊を許可される。この連隊は、英国陸軍のなかでも、門地の高い貴族の子弟に入隊資格があたえられるエリート集団

であり、ブランメルのような平民階層出身者が登用されるのは異例の事態であったが、彼はそれを事もなげに受け入れたという。

1796年には、入隊後わずか二年で大尉に昇進するが、カールトン・ハウスにおいても、駐留先のブライトンにおいても、洒落者ぞろいの連隊のなかで、いまやブランメルの存在はひととき異彩を放ち、その身嗜みの卓越と冷やかな礼節は、当意即妙のウィットや諧謔と相俟って、同僚はもとより上官たちの共感と賞賛をもかちうるようになった。しかしその二年後に、不安な世相を背景に秩序が乱れがちであった工業都市マンチェスターへの転駐の命が連隊に下されたとき、彼は軍人としての経歴に見切りをつけ、ロンドンにとどまることを決意する。もともと軍人稼業そのものに執着があったわけではなく、自分の個性が最も生かされる機会を待望していた彼は、社会的地位と生活の安泰を保證された軍人としての栄達よりも、浮き沈みの激しい、しかし自身の真価が遺憾なく発揮されるであろう社交界に、自らの活路を求める決断を下したのである。

## II

ブランメルが軍籍を離れ、公式に流行界への第一歩を踏み出したのは、二十歳の誕生日を迎えて間もない1798年8月のことであった。翌年には丁年に達し、父の遺言にもとづいて約三万ポンドを相続する。この額は、地道に暮らせば十八世紀末の独身者が生涯を送ってもなお余りあるものであったが、富裕な名門貴族に伍して、しかもヨーロッパ屈指の贅沢さを誇る英国社交界で活躍するには、あまりにも微々たる額といわねばならなかった。一週間にわたる盛大な誕生の祝賀に六万ポンドを費やしたり、舞踏会開催に八万ポンドを投じたりする最上流貴族たちの間では、三万ポンドなどほんのはした金でしかなかったのである。ここで当時の世相を一瞥しておくならば、領土問題や、産業革命に伴う各種の社会問題が国内外に山積するなか、首都ロンドンには遊蕩の気分がみなぎり、老若男女、階層の区別なく、人々が快樂の追及に明け暮れる状況が現出していた。ジャン・スタロバンスキーが『自由の創出』のなかで述べているように、現実を美的仮象として、つまり「ひとつの表象」として享受しようとする“快樂の哲学”が支配的だったのである。<sup>7</sup> こうした世の動向は、表象文化の一翼を担うファッションの領域にも如実に反映されていた。当代の流行をリードしていたのは、“ヨーロッパ第一の紳士”を自任する皇太子その人であったが、フランス宮廷風衣装の流れを汲むバロック的贅美を誇示する皇太子の服飾趣味は、軽薄人士のみならず、謹厳実直をもって鳴る政治家や学者たちの間にも、奇抜で派手な服装を競いあう傾向を助長する一因となっていた。要するに、節度や品位といった概念からはかけ離れた眩惑的装いが大手を振ってまかり通る風潮が瀰漫していたのである。

ブランメルが社交界の表舞台に登場したのは、このような風潮を背景としてであった。彼はまずメイフェアのチェスターフィールド街四番地に居を定めた。のちにグローヴァー・スクウェアに引っ越すまでの約10年間を過ごすことになるこの瀟洒な住まいは、けっして贅を尽くしたものではないにせよ、従僕の礼儀作法やお仕着せ、自慢のコックが腕を振る料理、葡萄酒から、家具、調度、美術品の類にいたるまで、すべてにわたって主人の目配りと吟味が行き届き、いっさいを知的に制御するところから生じる品格と趣味のよさを漂わせていた。名門の生まれではなく、財産にも恵まれていなかったブランメルは、豪奢に対するに豪奢を

以てするのではなく、あくまでも“黄金の中庸”を徹底させるという、節度ある優雅の道を選んだのである。

ブランメル我真髓ともいえる彼の衣装哲学もまた、同じ中庸の精神に根ざすものであった。彼が信条としたのは「衣服の色彩を消し去り、裁断を単純化し、そしてそれをまったく意識せずに着」<sup>8</sup> という、さりげない装いの美学であった。すなわち彼は、当代の貴顕紳士たちによって重んじられていた絢爛たる色彩や派手な装飾品を一掃して、黒と白を基調とする清潔かつ端正な身なりの徹底を図ったのである。それは一見なんの変哲もない装いの実践であった。しかしこの変哲のなさこそが、従来の価値観を一変させ、人々が夢想だにしなかった新しい英国式典雅の規範、ボードレールのいう「絶対的な単純」の品位を確立する礎となったのである。同時代を生きたバイロンは、ある精妙な小綺麗さ以外、ブランメル的身なりに何ひとつ特徴らしきものがなかったことを語っているし、<sup>9</sup> ヴァージニア・ウルフの次の言葉は、彼の典雅の精髓をおそらく的確に要約している——「彼の身ごなしの優美さは目をみはるばかりで、彼のネクタイ結びはすこぶる精妙なものだ。彼のかたわらへ行くと、だれの身なりにも飾りすぎや趣味のわるさが目立ち、なかにはまるで汚らしく映る者さえあった。」<sup>10</sup>

### III

ところで、ブランメルが一躍流行界の寵児となり、名門の婦人淑女たちの羨望と憧憬の念をかきたてる存在であったといえば、あるいは人は絶世の美男の姿を想いうかべるかもしれない。しかし、現実のブランメルは決して世にいう二枚目ではなかった。もとより醜悪さからは程遠く、その体形は見事に均整のとれたものではあったが、いくぶん長めの顔といい、とがりめの鼻といい、自信にみちた不遜な双眸といい、その面貌は必ずしも眉目秀麗とは言いがたかったのである。にもかかわらず、彼が優雅の王として、また趣味の審判者として、社交界に確固たる地歩を占めることができたのは何故か。ここでわたしたちは、外面的優雅の観点からだけでは説明しきれない、彼のダンディズムのもうひとつの側面に触れておかなければならない。それは、たとえば後に異国の地で波瀾の生涯を閉じたヘスター・スタンホープが伝える次のような逸話のうちに、その一端を窺うことができるものである。あるとき、彼女と言葉を交していた軍人の素性を尋ねるブランメルの言葉じりを捉えて、彼女が逆に彼の素性を問ひ糺す質問へと切り返したとき、ブランメルは半ば真剣にこう答えたという。

ああ、ヘスターさん。なるほど私の父のことを聞いたことがある者など誰もいないでしょう。いや私自身のことを聞いたことがある者すら一人もいなかったかもしれない。もっとも、私がいまの私の役割を選びとっていなかったとしたら話ですがね。ですがヘスターさん、あなたならおわかりでしょう、いまの私をつくりあげているのは、私のその愚かさにはかならないのです。もしも私が、公爵夫人たちを厚かましくじっと見据えてきまり悪がらせたり、皇太子にむかって無造作に会釈してみせたりしなければ、私の存在など一週間で忘れ去られてしまうでしょう。世間が私のそんな愚かな振舞いを賞賛してくれるほど愚かであるとするならば、あなたと私は少しは利口な方だといえるかもしれない。しかし、それが一体何になるでしょう。<sup>11</sup>

おそらくここにはブランメルのダンディズムの秘密、とって言い過ぎならば、それをささえる知的戦略とでも呼ぶべきものが暗示されている。すなわち、世間の愚かさに乗ずるおのれの愚かさをも自覚しつつ、あえて昂然たるダンディーの役割を演じることによって、個としての独自性を確保しようとする戦略である。

「ゆらゆらとたゆたい、冷笑しつつ、傲岸不遜すれすれのところをさまよい、無謀のふちをかすめながら、しかもつねに或る不思議な中庸のうちに留まる、それがブランメルの流儀であった。」<sup>12</sup>——ブランメルをこう評したのはヴァージニア・ウルフであるが、まさしく彼は一代の名優さながら、自らはつねに平静を保ちつつ、逆説によって、一瞥によって、沈黙によって、その場を支配する独特の存在感を有していた。いふなれば一種の身体芸術によって、巧言と虚飾によんだ流行界を攪乱し、かえって観客の喝采と畏敬を集める千両役者ぶりを発揮したのである。もちろんそれは観客を一方的に見下す傲慢とは一線を画していた。無礼と慇懃とを隔てる紙一重のところ留まること、その危うい綱渡りに赫々たる栄光が存することを、そして一歩足を踏み誤れば取り返しのつかない事態に陥ることを、彼はすべて知悉したうえで、ダンディズムの仮面劇を演じていたのである。

ダンディーがしばしば自覚的演技者に擬せられるのは、けっして理由のないことではない。ダンディズムが元来、都市文明の所産であり、他者との関係においてはじめて成立するものであるかぎり、ダンディーは自己の独自性を光輝あらしめる世俗の存在を絶えず想定している。別言すればダンディズムは、社会と対立しているようにみえながら、つねに社会の関数としてしか機能しえない宿命を負っているのである。ブランメルの天才は、ダンディズムの内包するこの本質的背理をおそらく感性的に察知し、それを知的戦略として最大限活用したところにある。いわば彼は、社会的通念を尊重しつつ、その世俗的価値に自我を切らせて社会化するという、自意識の政治学を実体化することによって、逆に世俗のうちに独自の存在意義を際立たせる方途を確立したのである。世俗の極北が典雅に通じ、典雅は世俗を内包することによって、真の典雅たりうるという逆説が成立するのは、おそらくこういう地点においてである。

#### IV

ダンディーの王としてのブランメルの地歩がこうして揺るぎないものとなった頃、摂政となった皇太子との確執が決定的なものとなるが、両雄の決裂は、早晩、不可避の定めであったかもしれない。その原因を皇太子にたいするブランメルの無礼に帰する巷間の伝説は信憑性に乏しいが、<sup>13</sup>真相はどうであれ、この出来事によってブランメルの威信は格別の痛手を被ることはなかった。それどころか高貴の友の寵愛を失うことによって、彼の矜恃と不羈独立はほとんど頂点に達し、その典雅な装いの前に、冷やかな礼節の前に、誇り高き名門貴族たちは膝を屈し、いまや偉大なダンディーの臨席が一つの勝利として、その欠席が一つの破局として受けとめられない催しや夜会は考えられないほどであった。一介の伊達者が、英国最上流社会の主役の地位にまで登りつめたのである。ブランメルの勢威を、彼に劣らぬウィットの達人として知られたアルヴァンレー卿はこう評している——「ブランメルは自らの手で植えつけた流行界という名の温室に、毎年一輪の花を咲かせる唯一のたんぽぽ [dandelion] であった。ふつう、社交界の花形でいられるのは、せいぜいが一年である。だがブラ

ンメルは不滅であった。』<sup>14</sup>

稀代のダンディーの栄光にも、しかし、やがて落日の秋が訪れる。ダンディーとしての誇りをかけたギャンブルがもとで、全財産を失うことになったのである。彼が本格的にカードや骰子に手を染めるようになったのは、流行界の王としてその声望が絶頂期にあった1813年頃からであったといわれている。当時、彼は多額の賭け金を誇る複数の高級賭博倶楽部に属していたが、ギャンブルへの情熱が人並み外れたものだったわけではなかった。ただ、莫大な金額を失ってなお微塵も動揺を見せないことが、ダンディーたるものにとって欠かさない条件とみなされていたのである。<sup>15</sup>最初の二年間は、持ち前の大胆さと的確な判断力で勝利を重ね、一晩で年収の二十倍相当の大金を手にしたこともあった。しかし、ひとたび幸運の女神に見放されてからは一気に負けがこみ始め、最終的に彼を待ち受けていたのは、途方もない借財の山であった。優美な自家用馬車も、愛用の嗅ぎ煙草入れコレクションも、稀覯本や家具や美術品も、食卓に美を添えたセーヴルの陶器も極上の葡萄酒も、ブランメルは手放さざるをえなくなる。そしてついに彼は栄光を飾った舞台に、永遠の別れを告げるべき時を迎えるのである。

その日、ブランメルはいつも通りの完璧な身仕舞いで「オペラ座」に姿を見せた。その沈着冷静な面差しに、かすかな笑みをたたえて。彼が入場すると、観客たちはいっせいに彼の方を振り返り、なかにはオペラグラスの焦点をダンディーその人に合わせる婦人たちも見受けられた。幕間には、知人たちと挨拶を交し、談笑するブランメルの周りに自ずと人々の輪が生まれた——「彼は焚火の上の不死鳥にもたとえられた、そしてそれよりもさらに美しかった、けだし彼はその灰の中から生れ変れないを感じとっていたからだ。彼を見て、誰が打ちのめされた男を想像しえただろうか?」<sup>16</sup>そして本物の舞台で最後の一幕が演じられつつあったころ、ロンドンにおけるブランメルの演技も大詰めに迎えようとしていた。彼はいつもよりほんの少しだけ早く、終幕のカーテンがおりる直前に、そっと席をたち、外套を手表にでた。正面玄関には内情を知る友人がさしむけた一台の馬車が待っていた。ブランメルは馬車に乗りこむと、ゆったりと腰を落ち着けてから馭者に行く先をつげた。ロンドン郊外で別の馬車に乗り継ぎ、夜を徹してドーヴァーへ。払暁、ドーヴァーで小さな帆船を借り、馬車ともども乗り込むと、フランスにむけて出帆し、二度と故国の土を踏むことはなかった。1816年5月17日、流行界の君主ボー・ブランメルの治世の終焉であった。<sup>17</sup>

カレーに逃れてからのブランメルについては、それほど多くのことを語る必要はない。自己破産に陥った英国人が、逮捕の手を免れるべくしばしば身を寄せたというこの対岸の小都市で、ブランメルの住まいは間もなく街の見所の一つとなり、身嗜みや行住座臥の美学は今なお健在であったが、実情は、金に窮し、友人や知己からの支援で、かろうじてダンディーの面目を保ち続ける暮らしぶりであった。それでも、英国の版元から高額な執筆料とひきかえに英国上流階層の内幕を明かす回顧録の上梓を懇請されたとき、ブランメルはあくまでこれを固辞したという。1830年からは、本国の友人たちの尽力で、カレー近郊の街カーンの英国領事を務め、一時的に貧窮を脱したが、二年後に領事職が廃止されて信用が失墜すると、1835年5月、ホテルの自室で逮捕拘留の憂き目を見る。知らせを受けた旧友たちが、資金を携えた使者を直ちに遣わして、ブランメルはほどなく自由の身となるが、逼迫した経済状況に加えて、このころから中風や脳卒中の症状に苦しみ、さらに追いつちをかけるように精神

にも異常を来し始めた。そして1840年3月29日、カーン郊外のボン＝ソヴール施療院において、かつてダンディーの王として君臨した男は、付き添いの看護婦にみとられつつ、静かに人生の幕を閉じた。享年六十一歳であった。

## V

ブランメルの生涯とは、結局、ダンディズムの魅力と危うさを最も典型的に具現化しながら、その美学を貫き、それに殉じていった人間の歩みであった。数々の伝説とともに語り継がれているものの、彼自身は歴史に名をとどめる一篇の芸術作品すら残してはいない。その意味では、彼はあくまでも一介のダンディーであり、ディレタントにすぎなかったといえる。ダンディズムにたいして批判的な立場をとる人々が存在するのもあながち不思議なことではない。カーライルがその『衣装哲学』のなかで、ダンディーを「その生業、その職分、その生活が、衣服を着ることに存する人間」<sup>18</sup>と揶揄したことはよく知られているし、フランスやドイツにおいても、ダンディズムのうちにロマンティズムの悪しき自我崇拜を見て、これを批判した批評家は少なくない<sup>19</sup>。

だが、ブランメルの生の軌跡を顧みてみると、はたして彼はカーライルが揶揄したような浅薄なダンディーにすぎなかったといえるであろうか。もし彼が社会的評判や体裁だけに執心する皮相な俗物の典型だったとすれば、たとえどれほど身嗜みが洗練され、居居動作が典雅であったとしても、バイロン、サッカレー、ハイネ、プーシュキン、ワイルド、ブルーストといった錚々たる詩人、文人たちから、あれほどの賛辞や関心を寄せられることはなかったであろう。なるほどブランメルが尊重したのは、一般に軽佻浮薄とみなされる外面的価値——衣服、立居振舞、社交のしきたり、しゃれた会話などであり、しかも彼はそれらを社会的地位や財産、出自といった価値よりも上位に格づけようとした。その姿勢にスノップの属性に通じるものが認められるかぎりにおいて、ブランメルにもまた俗物としての側面がないとは言えない。しかし、ブランメルがスノップの要件を具備しつつ、なおもスノビズムの域を脱していたのは、彼がどこまでも自覚的にスノビズムの驚くべき合理性を貫くことによって、おのずからそれを超えた何ものか、あえていえばダンディズムという様式芸術そのものと化していたからだともいえるのではないか。

ブランメルが個としての独創性を追及しつつも、同時に社会的規範をつねに尊重した事実を、改めてここで確認しておくべきかもしれない。ブランメルにみられる、こうした規範性への意志は、様式への希求として、あるいは仮面への希求として、ダンディズムの古典主義美学の重要な一面をかたちづくっていた。ダンディズムをロマン主義的自我崇拜の所産とみる通説とはちがって、真正のダンディーはそれほど素朴に自我の顕揚を旨ざしたわけではない。真のダンディズムの保持者にとって、自我は完全無欠な実体ではなく、たえず培い、統御すべき対象として認識されていたのである。ボードレールがダンディズムをストイシズムに隣接するものとして捉えた所以もそこにある。そこでは必然的に克己と礼節とが支配し、「人をおどろかすことの快楽、みづからは決しておどろかされることはないという傲慢な満足」<sup>20</sup>までが支配する。そして人を見抜く能力の修練の度合が、人間を格付ける決め手としての意味を帯びるのである。このときブランメルにとって、素面とは何であったのか。この稀代の演技者にとって、おそらく素面はもはや存在しなかった。そういつて言い過ぎならば、

彼にとってはダンディズムの仮面こそが素面であり、演技それ自体が哲学であり、あるとすれば唯一の倫理の表現であった。

ブランメルのダンディズム、それはロマン主義を包摂する古典主義美学に立脚した独特の身体芸術であった。彼の輩にならおうとした幾多の伊達者たちが、ついに彼のダンディズムを凌駕しえなかったのも、それがブランメルの存在とともに滅びざる表象的性格を有していたからにはほかならない。その表象性に由来する問題——仮面と素面、聖と俗、虚と実、日常と非日常、有用性と無用性、等——が、ヴィクトリア時代の現実をくぐり抜けて十九世紀末に顕在化し、その精神風土のなかからオスカー・ワイルドやマックス・ピアボウムといったダンディーたちが生まれるのは半ば必然の成り行きであった。もとより、ダンディズムの濫觴期に生きたブランメルが、自身のダンディズムについて、どれほどの洞察を有していたかは疑問も残るし、そこに潜在する哲学的・精神的意味が抽出されるには、なお時の試練を経た醇化と熟成が必要であった。しかしまたそれは、彼の存在自体に根ざした身体芸術としての一面を介して、ダンディズムが内包する表象性の問題を予兆している点でひとつの先駆けであり、同時に、近代市民社会における芸術家の在り方の問題をはじめ、その後切り拓かれていくダンディズムの地平をすでに射程に捉えているという意味で、真にダンディズムの淵源と称するに足るものであった。

## 註

- 1 シャルル＝ピエール・ボードレール「現代生活の画家」(阿部良雄訳『ボードレール全集』人文書院、1964所収) 321頁。
- 2 たとえば、Ellen Moers, *The Dandy : Brummell to Beerbohm* (Lincoln and London : University of Nebraska Press, 1960) の第8章から第10章を参照。
- 3 ブランメルの伝記的事実については、主として Kathleen Campbell, *Beau Brummell : A Biographical Study* (London : Hammond, 1948) に依拠した。
- 4 イートン校入学年を1786年とする説もある。Willard Connely, *The Reign of Beau Brummell* (New York : Greystone Press, 1940), p. 15.
- 5 Campbell, pp. 20-21.
- 6 Leon H. Vincent, *Dandies and Men of Letters* (London : Duckworth, 1914), p. 13.
- 7 ジャン・スタロピンスキー著、小西嘉幸訳『自由の創出——十八世紀の芸術と思想』(白水社、1982) 81-82頁。
- 8 Barbey D'Aurevilly, *The Anatomy of Dandyism, with Some Observations on Beau Brummell*, trans. by D. B. Wyndham Lewis and illustrated with dry-points by Hermine David (London : Davies, 1928), p. 31. ただし、ドールヴィイからの引用は、すべて生田耕作『ダンディズム——栄光と悲惨』(奢瀨都館、1987) 中の翻訳による。
- 9 Campbell, p. 70.
- 10 Virginia Woolf, *The Common Reader : Second Series* (London : Hogarth Press, 1948), p. 150.
- 11 Campbell, pp. 96-97.
- 12 Woolf, p. 51.
- 13 D'Aurevilly, pp. 43-44, Woolf, p. 51等を参照。
- 14 堀洋一『ボウ・ブランメル』(牧神社、1979) 217頁。

- 15 D'Aurevilly, p. 47.
- 16 *Ibid.*, p.50.
- 17 Samuel Tenenbaum, *The Incredible Beau Brummell* (London: Yoseloff, 1967), pp. 181-182.
- 18 Thomas Carlyle, *Sartor Resartus: The Life and Opinions of Herr Teufelsdröckh*, with an introduction and notes by Koichi Doi (Tokyo: Kenkyusha, 1922; repr.1982), p. 249.
- 19 生田222-223頁, Campbell, p. 87等を参照。
- 20 ボードレル, 321頁。

## Résumé

George Bryan Brummell, better known as Beau Brummell, was born in London in 1798 and started his career as a socialite with a meager income. Famed for the grace of his demeanour, readiness of repartee, and neatness of dress, he caught the eye of that other great dandy, George the Prince of Wales, who ushered him into the loftiest circles of London society.

By no means a mere fop, Brummell introduced daring innovations in personal appearance. Although his sartorial style ran counter to the prevailing fashions of the day, which were still suffering from baroque extravagance, he succeeded in subordinating the current trends to his dandiacal notion of good taste. As an incarnation of decorum, moderation and refinement, Brummell was catapulted from relative obscurity into being one of the most prominent figures on the English social scene.

Yet there was another factor underlying his renown — self-composure and intellectual aloofness: this was what made Brummell more than simply a well-dressed English gentleman. With a motion of his finger, he could beckon to dukes and duchesses and they would hasten to him, flattered at his recognition, while the doors of palatial mansions would swing open before him as if in the presence of royalty. By combining a trenchant wit and exquisite taste, he perfected the art of honouring by dishonouring, dominating the most aristocratic society in all Europe as the king of dandies.

The present essay attempts to trace the main facts of the Beau's personal history before we characterize his particular form of celebrity as a prototype of the modern dandy. Our primary aim is to show that Brummell epitomized not merely a principle of personal elegance but also a philosophy of life based upon almost stoic self-mastery. His dandyism heralded a new archetype of manhood, which would develop into the intellectual and artistic pursuits of the dandies and aesthetic literary figures of the nineteenth century, including Baudelaire and Wilde, who devoted themselves to an ideal of singularity from the common multitude.